

文部科学省
IB教育推進コンソーシアム



STUDENT TESTIMONIAL

下田 京香さん（昌平高等学校 2023年3月卒）

昌平高等学校を2023年3月に卒業。
筑波大学国際総合学類に進学し、英国・University of Sheffieldに1年間留学。
現在は国際関係学を専攻している。

当たり前を問い続ける旅～IBから国際関係学の探究へ～

IBを通して身についた力

IBでの探究型学習を通じて、批判的思考力に基づく「問いをつくる力」と「答えを導く推進力」の両方を身につけることができた。私がIBで学んだ「批判的」な学習者の在り方は、二元論的な批判（物事の裏側の指摘）にとどまらず、その事象が成立する構造的要因を捉え、本質的な課題の解決を試みる姿勢にある。

特に印象的な授業は、高校2年生の時に勃発したロシアによるウクライナ侵攻について、History（HL）の授業でウクライナ・ロシア・米国の視点からこの事象を捉えた記事を分析したことだ。各国が、多様な歴史・文化・政治的要因に構成された、全く異なる「正しさ」を有していることを学び、私の知の基盤に存在する「正しさ」への観念が大きく揺らいだ。私にとってIBでの学びは、こうした「当たり前の揺らぎ」の繰り返しであり、その面白さと共に、探究を続ける旅でもあった。

私にとって当たり前だった観念が問われるべき事象であると気づいたことは、多様な問いをつくる力を育むとともに、自身の答えを導く推進力にもなった。IBでは、何に疑問を持つかと同時に、問いにどのようにアプローチし、答えの根拠を示すかが重視され、そのアプローチに関しては各人に一定の裁量が与えられているように思う。この難題に取り組む過程で、自身の関心分野を模索して深化させることができる環境を高校生の段階で得られたことは、IB教育の有意義な点の一つだった。同時に、多様な視点を持つクラスメートと、批判的な視点を含む意見の交換を通じて共に知識を深める経験は、自らとは異なる世界観をもつ他者への想像力と、それを鏡とした自己理解を培える点で非常に価値のあるものだった。

IBで身につけた力は、その後どのように活かされていますか？

国際関係学を専攻する中でIBでの学びが活きていると実感するのは、既存の枠組みにとらわれず、異なる学問分野の視点や研究手法を横断的に取り入れ、新たな視点から物事を捉えられた時だ。伝統的な国際関係論への理論と、他分野の知見や研究手法への理解を柔軟に使い分けたり融合させたりすることは容易ではない。それでも、既存の理論や枠組みだけでは十分に捉えきれず周縁化してしまう事象や人々の存在を捉えるためには、分野横断的な思考と創造性が欠かせない。IBを通じて培った、学問領域間のつながりを意識し、既存の枠組みや自分自身の思考を批判的に問い続ける姿勢によって従来とは異なる視点から物事を捉えられたとき、IBで学んだ意義を実感する。

TOK（知の理論）で学んだこと

TOKの学習で知識の在り方を問い続けた経験は、現在の私の研究関心の基盤を形成するとともに、思考者としての自身の基盤となる価値観を批判的に振り返る姿勢を習得することにつながった。

最も印象的だったのは、知識の伝達過程において知識に歪みが生じるのか、という議論だ。発話者が伝達する知識と、聞き手が発話されたこととして受け取る知識の有り様の間に差異が生じることに加え、聞き手の間でも、どのような文化・宗教・政治的信条等を持つかによって発話された知識に対する理解は異なることが多い。この「言われたこと」に対する共通理解の不足が伝達された知識に歪みをもたらし得るという学びは、

私の現在の国際関係学に対する関心の基盤になっている。すなわち、正統性を帯びた知識がどのような政治的階層構造に規定され、いかに特定の人々の存在や不条理な経験を語ることなく忘却し、周縁化するのかという問いである。

そのような、国家の「公式的な」知識（記憶）生産体制に関心を持ち研究する中で、私はＩＢで学んだ「自らの知識の在り方に内省的であること」を常に意識している。特に日本の事象を取り上げる際に、日本人女性である自身がその事象のどこに存在しているのか、私が真とする知識はどのように形成されているのか、といった問いをもって探究し続けられていることは、まさにＩＢで学んだからこそだと考えている。

ＣＡＳ（創造性・活動・奉仕）で印象に残っていること

ＣＡＳとして取り組んだ活動は、学校周辺地域の清掃活動からＩＢ教育の理解促進イベントの運営まで多岐にわたる。それぞれの活動を小規模で行ったことで、高校生ながら社会人の方々と密接にコミュニケーションをとる機会を得ることができた。私にとってＣＡＳで学んだ最も重要なことは、自身の人生を構成するものが、それまでの人生の大半を占めていた勉強、あるいは将来的な仕事のみではないという実感である。それは言葉にするとあまりにも当然で、特筆すべきことではないと思われるかもしれない。一方で、日本社会で教育を受け、学歴や将来のキャリア形成について少なからず社会的プレッシャーを受けながら勉強に取り組んできた当時の私にとって、その当たり前を自らの人生に関わる本質的なこととして捉えられたことは、今も私の人生観の土台となっている。また、人生の在り方を柔軟かつ創造的に捉え、自己と対話する習慣を得たことは、その後の人生で複雑な環境要因から自分らしさを守る術を少しずつ身につけていく基盤となったと思う。

大学受験や進路選択で意識したこと

中学生の時に読んだ緒方貞子氏（元国連難民高等弁務官）の自伝書が心に残っており、紛争解決や平和構築に貢献したいという漠然とした思いを高校生の時から抱いていた。そのため、海外で学ぶことに憧れをもっていたが、具体的に深く学びたい学問領域が明確ではなかったことに加え、当時の私は海外に渡航した経験がなく英語での思考力が十分ではなかった。そこで、複数の学問領域を日本語で学び、学問への解像度を向上させた上で、より深く学びたいことができた時に海外留学を選択できる国際関係の学部を選択することにした。実際に、筑波大学国際総合学類で文理融合型の学びを経験し、さらに協定校である英国の大学への留学を通じて異なる学術的アプローチに触れたことは、現在の私の学術的基盤を形成する重要な経験となった。

今後のキャリアについて

学部卒業後は、国際関係学の理論研究が盛んな海外大学院への進学を目指し、準備を進めている。国際関係の進路は非常に多様であり、研究者と実務家（国家公務員やＮＧＯ、一般企業への就職など）のどちらの方向に進むか、長い時間をかけて考えた。机に向かって考えられる範囲には限度があるため、国内の行政機関や国内外のＮＧＯでのインターンシップに参加した。また1年間の英国留学中には、関心のある研究を行う現地の教授に自ら連絡を取り、研究内容や進路について相談した。こうした経験や対話を通じて、私の関心は既存の枠組み内での交渉戦略や制度形成等よりも、その既存枠組み自体がどのように構成されてきたのかといった問いにあると気づいた。さらに、英国の国際関係学会で研究発表を行い、学術的議論に参加したことで、進路目標がより明確になった。このように、ビジョンが明確ではないときでも、まずは自分にできる最善を尽くし、自らの視野を広げたり目標を明確にしたりするための主体的な思考力や推進力は、ＩＢで培われたものだと考える。

人生の中で、進路の決断を迫られ、迷い悩むことを繰り返すのは自然なことであり、必ずしも長期的かつ一貫性のある道筋を歩むことが正解ではないように思う。今の私が研究の道を正解と考えていても、未来の自分は違う正解を持っているかもしれない。自身の特性や関心を踏まえた「軸」を持った上で、その軸を基準としたある程度の振り幅を許容することで、多様な経験を得ることも重要である。ＩＢを通して私は、正解を持つこと以上に、なぜ自分がそれに正解を見出したのかを深く理解することの重要性を学んだ。この学びを、今後のキャリア形成においても大切にしていきたい。